

◆『引揚者の戦後』書評Ⅱ

◎日常生活文化という視座が引揚げ研究にもたらずもの

松浦 雄介（熊本大学）

はじめに

植民地から本国への帰還としての引揚げは、日本のみならず、かつて植民地を所有したヨーロッパの国々にも多かれ少なかれ見られる。評者はフランス植民地帝国における最大の植民地であったアルジェリアの独立後、フランス本国に引き揚げた入植者とその子孫（通称「ピエ・ノワール」）や、アルジェリア独立戦争時、フランス軍に従軍し、戦後にフランス本国に移住した現地住民（「アルキ」）について研究しており、日本の引揚げについては直接的な研究テーマとしているわけではない。本書評は、そのような立場からのものであることを最初にお断りしておきたい。

1. 引揚げの民俗学という視座

歴史的事象を研究する場合、その事象をもたらしただ原因を探求し、一貫した歴史的因果関係のなかに置くというのが一般的な方法だろう。引揚げという歴史的事象についても、そのような研究が展開・蓄積されてきた。しかし歴史的事象の研究にはもう一つのアプローチがある。それは、歴史的事象の原因よりもむしろ結果に注目し、「その事象が何をもたらしただか」または「その事象は後世にどのような意味や影響を及ぼしたか」に焦点を当てる方法である。

たとえば記憶は、そのようなアプローチによって研究されることの多いテーマの一つである。壮大な共同研究『記憶の場』によって記憶という主題を歴史学に導入し、関連領域にも大きな影響を及ぼしたのはフランスの歴史家P・ノラであるが、その『記憶の場』の英語版序文「『記憶の場』から『記憶の領域』へ」で、ノラは次のように述べている。

その歴史は、原因より結果に多くの関心を寄せる。想起されたり、記念された行動それ自体より、これらの行動が残した足跡や顕彰活動の相互作用により関心がある。事件それ自体よりも、時を経て事件のイメージがどう作られていくか、その意味が消滅したり、蘇ったりすることのほうに注目する。「実際に起こったこと」よりも、出来事がたえず再利用されたり、誤用されたりして、現在に引き継がれるその影響に着目する。伝統よりも、伝統が創られたり、衰退したりする仕方のほうに関心がある。ようするに、この歴史学は…言葉の能うかぎりの意味での「再記憶化」である。つまり、過去の想起としての記憶ではなく、現在のなかにある過去の総体的構造としての記憶に関心をよせる歴史学なのである（Nora 1996=2002: 27-28）。

1) アルジェリアをフランスの植民地と呼ぶのは、厳密には正しくない。フランスのアルジェリアへの進出は1830年に始まったが、1848年の第二共和政成立以降、アルジェリアは3つの県に分割され、フランス本国に行政的に直接組み込まれ、統治されることになった。同年に制定された憲法ではアルジェリアはフランスの「不可分の一部」と表現されるなど、フランスにとってアルジェリアは数ある植民地のうちのひとつという以上の位置づけがなされたのである。しかし、ここではその点についてはこれ以上立ち入らない。

引揚げ研究においても、近年、その体験がどのように記憶されてきたかに注目する研究が見られるようになってきた。たとえば満州からの引揚者の記憶を論じた坂部（2008）や猪股（2008）、あるいはフィリピンを事例として同じテーマを論じた飯島（2011）や木下（2011）などがある。これらの研究では、引揚者たちが戦後に行った慰霊活動や、かつての入植地の人々との交流活動などについても論じられている。また、これら以外に引揚げ「後」に焦点を当てた先駆的研究として、引揚者の戦後開拓を論じた蘭（1994）がある。かなり強引な単純化であることを承知の上で言えば、歴史学が引揚げの歴史的過程に目を向けるのにたいし、同時代を対象とすることの多い社会学では引揚げ「後」が意識されやすかったと言えるだろう（もちろん実際には、ほとんどの研究者は引揚げの「前」と「後」の両方を視野に入れつつ研究しているが）。

タイトルが端的に示す通り、本書は引揚げ「後」に焦点を当てている。先行研究と較べたとき、本書の新しさは民俗学（や比較文化）の分野から引揚げ研究を展開した点にある。歴史学と社会学を中心に行われてきた従来の引揚げ研究でテーマとされてきたのは、引揚げの背景にある国際関係や政策、引揚げの歴史的過程と生活史的体験、引揚者の社会意識や社会組織などであった。本書のなかには、このような従来の研究と親和的なテーマを扱ったものもある。たとえば恩賜財団同胞援護会による引揚者援護を取り上げた3章、樺太をめぐる引揚げと残留を扱った4章、戦後開拓を扱った6章は、従来の引揚げ研究の延長上で理解することができる。

それにたいして民俗学的な視座から書かれた諸論稿では、従来の引揚げ研究にあまり見られなかったテーマが取り上げられている。たとえば戦後に引揚者がもたらした、または引揚者に関係してつくられたさまざまな社会空間と文化を論じた1章や、引揚げおよび引揚げ後の個人的体験を豊かな記憶力でモノグラフ的に活写した2章、北方四島から北海道へ信仰と祭祀の「引揚げ」を論じた5章、パラオ引揚者が持ち帰った歌を分析した7章など、引揚者の日常生活に密着した文化を扱った章がそれである。日常生活文化という問題系に光を当てた引揚げ研究は、管見の限りではこれまであまりなかったように思われる。この点は、やはり民俗学という学問分野ならではの大きな貢献だろう。以下に、本書が開拓した引揚げの民俗学的研究の射程について、評者なりの感想を記してみたい。

引揚者がもたらした生活文化や引揚げ後の生活史について論じる1章や2章には、従来の引揚げ論とはずいぶん異なる雰囲気が漂っている。従来の引揚げをめぐる語り－体験者のそれであれ、研究者やジャーナリストのそれであれ－は、重い雰囲気を漂わせていることが少なくない。そのことは、引揚げという事象がどのような個人々の具体的体験をともなうものであったかを考えれば、容易に理解することができる。居住の場所を失い、「外敵」に囲まれながら内地を目指して移動する過程は、極度の飢えや寒さ、病気、肉体的疲労などに苛まれ、そして掠奪、虐殺、性暴力などさまざまな暴力に晒されもする過程でもあり、そして引揚げ後の生活は、土地も財産も失い、なおかつ周囲の人々から差別的な目を向けられるなかで始められなければならなかった。これらのさまざまな苦難の体験が、引揚げの一般的なイメージの中心に置かれてきたのも、自然なことだろう。

しかし本書の1章や2章には、そのような重い空気がない。もちろん、引揚者差別などに触れられることもあるが、中心的な主題としてではなく、あくまで一断面としてであり、全体的な雰囲気はむしろ明るいくらいである（とくに2章）。この明るさは、どのように理解すればよいのだろう

か。もしもその明るさに著者の個人的なパーソナリティ以上のものがあるとするれば、それは戦後日本社会の、ある種の空気を表しているのかもしれない。つまり、引揚者たちは多くの苦難を抱えながらも、その後の高度経済成長もあり、次第に社会のなかに包摂されてゆき、苦難の記憶もかなりの部分溶解していったがゆえの明るさなのかもしれない。あるいは、世代の問題も関係しているのかもしれない。引揚げ時点での年齢によって、引揚げの記憶も異なってくる場合がある。2章の著者の篠原徹氏は1945年に生まれ、外地での生活経験の記憶はほとんどない。2章の明るさの理由について考えるとき、評者はフランスで出会った一人の引揚者のことを思い出す。アルジェリアからフランスへの引揚げる時点で7歳だった彼は、インタビューの際に次のように語った。「引揚げの時に大人だった人たちは『ああ私の愛するアルジェリア、麗しき祖国』などとアルジェリアを理想化して語るけど、子どもだった自分にとってはフランスへの引揚げは未知なる場所への移住でワクワクするものだったよ」。子どもたちにとって、引揚げは故郷喪失であるよりも、見知らぬ新たな場所への冒険であったかもしれない。いずれにしても、これらの章が提示するのは「苦難としての引揚げ」ではなく、その苦難からの「再生としての引揚げ後」のイメージである。

惜しむらくは、この「再生」のイメージは、本書全体で共有されていない。本書の他の章のなかには、従来の「苦難としての引揚げ」のイメージに立脚して論じられているものもあり、そのために一冊の中に二つの異なるイメージが混在しているようにも見える。もしも「再生としての引揚げ後」のイメージで本書全体が構成されていたならば、新しい引揚げのイメージをより鮮明に提示することになったのではないだろうか。「苦難としての引揚げ」に焦点を合わせる従来の引揚げ論から見れば、そのイメージは戦後も長らく続いた（あるいは今日でも続いている）多くの苦難の体験を忘却／隠蔽しているのではないかと、という反論が起こるかもしれないが、しかしまさにそのような論争をつうじて、戦後日本における引揚げの包括的理解に近づくことができるだろう。もしかすると、一冊のなかに「苦難としての引揚げ」と「再生としての引揚げ後」の両方のイメージを同居させる本書には、引揚げの多面的な理解を促すという効用もあるかもしれない。しかしそうだとすると、この二つの側面の関連についてももう少し踏み込んだ議論があれば、その多面性がさらに生きてきたのではないかとと思われる。

日常生活文化への注目は、引揚げ研究の新たな領域を開拓したのみならず、引揚げ研究そのものへの新たな関心を掘り起こす可能性も秘めている。餃子や明太子など、現在の日常生活においてごくありふれたものが、実は引揚げの歴史と関わっていると述べることは、興味深い歴史の一エピソードの紹介というにとどまらず、複雑な歴史的事象にアプローチする一つのユニークな方法を示唆しているようにも思われる。ありふれた日常生活文化から大きな歴史につなげてゆくことは、歴史の研究（と教育）の新しい方法にもなりうるのではないだろうか。

6章のなかに、著者があるフィールドに行った時、現地の人から「あと一〇年だけ早ければ、もっといろいろ聞けたのに、残念です」と言われ、筆者がそれに同意しつつも、しかし一〇年早く調査をしても、きっと「あと一〇年早ければ」と言われたのではないかと述べる箇所がある（P.311）。どことなくユーモアの感じられる記述であるが、一〇年経つごとに聞き取り調査による引揚げ研究が難しくなっていくことは否めない。もしも聞き取り調査が不可能となったときに、引揚げ研究にはどのような方法が可能だろうか。もちろんさまざまな方法がありうるだろうが、本書

のなかでなされているモノ（食べ物や建物、場所など）への注目は、一つの方法となりうるだろう。人とモノとは異なる時間的・空間的スケールで存在する。モノは、時に過去の、時に異文化の痕跡として、「いま・ここ」ではない時間と空間を示唆する。生活文化を研究する民俗学にとっては、モノへの注目はオーソドックスな方法であるのかもしれないが、従来、主に文書記録と聞き取りデータに依拠してきた引揚げ研究に導入されることで、新しい研究領域（引揚者がもたらした日常生活文化）を開拓することになった。

2. 引揚げの民俗学をめぐる幾つかの論点

これまで、本書が切り拓いた引揚げの民俗学的研究の可能性について述べてきたが、続いて、その視座にまつわる三つの問いを投げかけてみることにしたい。

第一に、引揚げを帰還移民 *return migration* の一例として一般化することの妥当性について。引揚げ研究をより広い移民研究の文脈のなかに位置づけて捉え直した8章では、引揚げの歴史的経験を個別的な事例研究にとどまらず普遍化することが重要であるとして、近年の移民研究で注目されつつある「帰還移民」の概念を適用し、他のさまざまな帰還移民と関連づけながら論じることが提唱されている。評者は引揚げの歴史的経験を普遍化することの意義について、筆者に同意する。しかし、その普遍化のために帰還移民の概念へと一般化することの意義については、懐疑的である。引揚げは、たしかに帰還移民と移動のベクトルは同じであるが、「帰還移民」の概念には多様なケースが含まれ、そのなかには引揚げとの関連がほとんどない場合も少なくない。引揚げは、歴史的な文脈による規定性が高い事象である。それは植民地帝国が崩壊し、国民国家へと領土を収縮させるなかで生じた人の移動である。それゆえにそこには強制移住にも近い側面が少なからずあり、それが引揚げにまつわる種々の苦難の源泉ともなってきた。移動のベクトルが同じという理由だけでそれを帰還移民の概念のもとに一般化すると、この重要な要素が抜け落ちてしまうのではないだろうか。評者としては、歴史的な文脈をふまえつつ、なおかつ歴史的個別主義に陥らずに引揚げ体験の普遍化を試みる研究は可能であると考えている。評者は現在、ヨーロッパと東アジアを中心に、引揚げの国際比較を行う研究会に関わっているが、そこではまさに、引揚げという事象を、歴史的な文脈をふまえて考察しつつ、他国の事例と対照することで普遍化につなげてゆくことを目指している。

第二に、引揚げの民俗学的研究における歴史的位置について。先述のとおり、本書は日常生活文化に照準を合わせることで、引揚げ研究の新たな方法と領域とを開拓した。それは豊かな可能性を秘めた鉅脈であると思われるが、その可能性をより確かなものにするために、次の点を尋ねてみたいと思う。すなわち、引揚者の生活文化というマイクロな次元と植民地帝国の崩壊というマクロな歴史的な文脈とをどのようにつなげるのか、ということである。従来の引揚げ研究では、国家や国際関係の次元と個人の生活史的体験の次元との関連は、さまざまに意識されていた。引揚げは国家や国際関係に規定・影響される部分が少なくないため、たとえ生活史の次元に焦点を当てるにしても、おのずとマクロな歴史的な文脈を意識せざるを得ない。本書では、基本的にマイクロな生活文化や生活史に照準が当てられているが、マクロな歴史的な文脈についてはほとんど言及されていない。だからこそ、従来と異なる「明るい」引揚げ論を展開することが可能になったと言えるかもしれないが、

引揚げ研究が歴史的文脈をカッコに入れてなされることに、いささかの戸惑いも感じるのが正直なところである。このような視座の限定は、「聞き取りはこの時期を逃しては不可能になる」(P.8) ため、とりあえず聞き取り調査に専念するという緊急措置としてなされたものなのだろうか。それとも、マクロな歴史的な文脈をあえてカッコに入れ、日常生活文化に照準を絞る方法に研究上の積極的な意義を見出してのものなのだろうか。マクロな歴史的な文脈は、引揚げの民俗学的研究のなかでどのような位置を占めるのだろうか。

第三に、トランスナショナルな視座からの引揚げ研究の意義について。引揚げは、国民国家と密接に関係する事象である。それは帝国が植民地を喪失し、国民国家へとその領土が収縮するなかで生じる人の移動であり、そして政府が引揚者を受け入れ、援助するのは「同胞」すなわち同じ国民だからである。引揚げおよび引揚者自身が、国民国家と分かちがたく結びついている。しかし他方で、引揚げは国民国家を超える、またはそこからみ出る部分も持った現象である。そもそも外地への入植は異文化との接触であり、だからこそ餃子や明太子など、引揚げ後には、もともと日本にはなかった文化がもたらされた。また、外地にいた人の多くは内地に引揚げ、各地で再定住していったけれども、これが唯一のパターンだったわけではない。外地に残留した人、内地に引揚げ後に海外に再移住した人もいる。ここで評者が念頭に置いているのは中国残留日本人や、日本に引揚げた後にブラジルなどに再移住した人々のことであり、と同時に、アルジェリア独立後にフランス本国に向かわず、現地に残留したり、またはニューカレドニア、スペイン、アメリカ、カナダに向かったフランス人入植者(ピエ・ノワール)たちのことである。引揚げという事象を包括的に捉えるためには、このようなトランスナショナルな側面も視野に入れることが重要になってくると思われるが、民俗学的視座からは、この側面についてどのようにアプローチされるのだろうか。評者自身は、その一つの方向性は、既に本書のなかに示されていると感じている。すなわち、生活にまつわるモノを手がかりとして、引揚げのトランスナショナルな側面にアプローチすることである。先述したとおり、モノは人よりも大きな空間と長い時間のなかで存在することができ、その意味でまさにトランスナショナルな移動をする。今日、コーヒーやお茶を対象にしてグローバル・ヒストリーを書く試みがあるように、餃子や明太子など、何らかのモノを対象にして引揚げを含んだトランスナショナル・ヒストリーが書かれたならば、きわめて刺激的な研究になると想像するのだが、どうだろうか。

以上、本書が切り拓いた引揚げ研究の射程について論じてきた。モノをつうじて歴史にアプローチした本書は、新しい引揚げ研究の始まりを予感させる。

参考文献

- 蘭信三, 1994, 『「満州移民」の歴史社会学』行路社。
 飯島真里子, 2011, 「フィリピン日本人移民の戦争体験と引揚げー沖縄出身者を中心に」『アジア遊学』第145号、勉誠出版。
 猪股裕介, 2008, 「満州体験を語り直すー岐阜県黒川分村遺族会を事例として」蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版。
 木下昭, 2011, 「慰霊からボランティアへーダバオがつなぐ日本人と日系人」『アジア遊学』第145号、勉誠出版。

坂部晶子, 2008, 『満州』経験の社会学－植民地の記憶のかたち』世界思想社。

Nora, P., 1996 "From *Lieux de mémoire* to *Realms of Memory*", Nora (ed), *Realms of Memory: Rethinking the French Past, vol.1—Conflicts and Divisions*, Columbia University Press. (=2002, 谷川稔訳『記憶の場』から『記憶の領域』へ 英語版序文], ノラ編『記憶の場—フランス国民意識の文化=社会史 第一巻(対立)』谷川稔監訳、岩波書店.)

◎書評にこたえて

島村 恭則 (関西学院大学)

松浦・松田両氏が共通して投げかけている最大の問いは、戦争、植民地帝国とその崩壊、帝国の「影」といったマクロな歴史的な文脈は、本書における引揚者の生活文化をめぐる記述の中でなぜ正面から取り上げられないのか、マクロな歴史的な文脈は引揚者の生活文化研究の中でどのような位置を占めるのか、というものであろう。この点について、現時点では、本書の執筆者の間で議論を行なう機会を持っていない。したがって、以下は、わたし自身の調査に限定してのものとなるが、若干、コメントしておきたい。

歴史的な文脈がなぜ正面から取り上げられないのか、について、松浦氏は、「このような視座の限定は、『聞き取りはこの時期を逃しては不可能になる』ため、とりあえず調査に専念するという緊急措置としてなされた」ためか、あるいは「マクロな歴史的な文脈をあえてカッコに入れ、日常生活文化に照準を絞る方法に研究上の積極的な意義を見出してのものなのだろうか」と推測しているが、どちらもそのとおりである。と同時に、もう一つ、2010年代における調査の現場では、マクロな歴史的な文脈につながるような語りが話者（インフォーマント）の口から語られることはそれほど多くなかった、という事情もある。

第1章の記述のもととなった調査は、2008年から2010年にかけて行なったものだが、そこでわたしが出会った話者の多くは、引揚げ後に日本で生まれた人や、あるいは引揚げのときにせいぜい小学生だったという人が多かった。この人たちは、引揚者家族の戦後生活史についてはまさに当事者として多くのことを語ってくれたが、親が「外地」のどこで何をしていたのか、さらには「外地」へ移住する以前の生活はどのようなものだったのか、については、個人差はもちろんあるものの、多くを知らない、あるいはまったく知らないということが少なくなかった。「現場のせい」にするわけではもちろんないが、調査の現場におけるこうした状況が、結果として記述における歴史的な文脈の希薄さにつながった面もあったように思う。

とはいえ、これは調査の現場での話であって、記述や分析の場面においては、当然、歴史的な文脈への配慮が十分に行なわれる必要があった。それはたとえば、引揚者とその家族は、いつごろからどのような経緯で歴史的な文脈から遠ざかるようになったのか、あるいは現在でも「歴史的な文脈を生きる」人びとがいる場合、それはなぜか、どのようなかたちで生きられているのか、といった問いも含むことになるだろう。こうした点については、松田氏の指摘にある「語り」をめぐる方法論的省察とあわせて、文字どおり今後の課題である。